

英語の助動詞構造とその関連問題について

浅川 照夫*

(昭和55年3月31日受理)

English Auxiliary System and a Certain Related Problem

by Teruo ASAKAWA

Many grammarians have argued against the traditional analysis of the English auxiliary system proposed in Chomsky (1957). The claims common to them all are that the perfective and progressive auxiliaries must be incorporated into the verb phrase, and that the verb phrase must be layered. As an example of such an approach, Akmajian, Steele, and Wasow (1979) will be reviewed and criticized in this paper. They have analysed the auxiliary system within the framework of \bar{X} -theory, but ignored one of the most important points of that theory, that is, various sorts of complement phrases can be structurally distinguished only if \bar{X} -theory is assumed. This paper shows that, when the complements to the verb phrase are taken into consideration, the phrase-structure rules in Akmajian, Steele, and Wasow (1979) must be modified as in the following;

$S \rightarrow NP \text{ AUX } V^3$

$AUX \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{Tense do} \\ \text{Modal} \end{array} \right\}$

$V^3 \rightarrow \langle \text{have-en} \rangle V^3$

$V^3 \rightarrow \langle \text{be-ing} \rangle V^2$

$V^2 \rightarrow V^1 (PP) (S)$

$V^1 \rightarrow V (NP) (PP) \dots$

The point of this modified theory is that V^3 is a recursive category, and the complements to the verb phrase are distributed into V^1 or V^2 level.

This paper also deals with one of the problems relevant to the auxiliary analysis, that is, the position of S-adverbs. It will be shown that this problem must be accounted for partly by the perceptual strategy which says that an element adjacent to the verb is interpreted as the modifier of that verb.

* 北見工業大学一般教育等

序 論

生成文法理論の中で、助動詞の分析については各種の仮説が対立している。最も重要で、かつ基本的なのは、助動詞範疇を認める案—句構造分析案—と、それを認めない案—本動詞分析案—との対立である¹⁾。前者によると、助動詞は句構造規則によって独立の範疇として統語構造に導入されるが、後者の立場では、助動詞は go, love 等の動詞範疇に属するものと見做され、助動詞範疇は存在しない。本稿は、句構造分析案の立場を採用して議論を進めることを初めに断っておく。

句構造分析案の中でも、種々の意見が対立しており、これと言った決定版がないような状況である。助動詞を構成している要素には、時制 (Tense), 法 (Modal), 相 (Aspect) の三つがあるが、これら三要素と動詞句との構成素構造に関して、諸仮説が対立していると言える。句構造分析案の代表的な例の一つは、Chomsky (1957), Akmajian and Wasow (1975) 等に見られる伝統的な考え方であり、時制, 法, 相が次の句構造規則によって導入されるというものである。

(I) Aux → T (M) (have-en (be-ing))

ここ数年来、(I) に反論する形で、多くの研究が行われてきている。それらの研究は、理論的枠組みが少しずつ異なるので、全く同一という訳にはいかないが、相助動詞 (have-en, be-ing) を Aux から除外して動詞句に組み入れているという点で概ね一致している²⁾。

(II) VP₁ → (have-en)-VP₂

VP₂ → (be-ing)-VP₃

VP₃ → V-(NP)-...

(II) の分析案は、経験的な事実に照らし合わせてみて、(I) より妥当であると思われる。しかし、今までに提案された (II) の案を詳細に調べてみると、不備な個所が幾つか見受けられる。本稿は、そのような研究の一つとして、Akmajian, Steele and Wasow (1979) を取り上げ、その概要を略述して、より妥当な修正案を提起することが目的である。第1章では、Akmajian, Steele and Wasow (1979) を紹介し、第2章で修正案を示す。第3章では、これまで助動詞構造との関連で説明されてきた文副詞の位置の問題について論じる。

1. Akmajian, Steele and Wasow (1979)—以下 ASW

ASW の助動詞分析は、次の句構造規則に基づいて行われている。

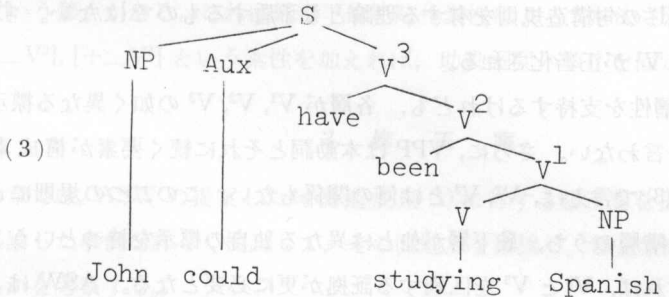
(1) S → NP-Aux-V³

$$\text{Aux} \longrightarrow \left\{ \begin{array}{c} \text{Tense do} \\ \text{Modal} \end{array} \right\}$$

$$\text{V}^n \longrightarrow \left\{ \left[\begin{array}{c} +V \\ +\text{Aux} \end{array} \right] \right\} - \text{V}^{n-1} \dots$$

従って、(2) のような文は (3) の構造を持つ。

- (2) John could have been studying Spanish.



ASW は、二つの変形規則と動詞の分布上の特性を証拠として用いて、(3) の構造を正当化している。まず、(3) において V^1 , V^2 , V^3 がそれぞれ構成素を形成しているが、これは動詞句削除変形規則—以下 VPD によって裏づけられる。VPD は (4 a) を (4 b) に変える。

- (4) a. John can swim, and Mary can swim, too.
 b. John can swim, and Mary can ϕ , too.

次の文においては、(b, c, d) は (a) から VPD によって派生されている³⁾。

- (5) Fred could have been studying Spanish, and
 { a. John could have been studying Spanish } , too.
 { b. John could have been ϕ }
 { c. John could have ϕ }
 { d. John could ϕ }

一般的に、削除される項は構成素を形成していなければならないから、(I) の規則を持つ理論は、VPD によっては (b) だけしか生成できない。(c, d) については他の道具立てが必要となる。(3) の構造は、studying Spanish, been studying Spanish, have been studying Spanish が全て構成素を成しているという事実を捉えているので、一つの規則 VPD によって (b, c, d) が派生されると簡潔に述べることを可能にする。このように、(5) の文は、動詞句の階層性を根拠づける。

次に、動詞句に階層を設ける必要のある証拠として、ASW は動詞句前置変形規則—以下 VPP を挙げている。この規則は、(6 a) を (6 b) に変える。

- (6) They all said that John would pass the test, and
 { a. he passed the test. }
 { b. pass the test he did! }

VPP は、次の文から明らかな様に、最少の動詞句しか前置することができない。

- (7) They swore that John might have been taking heroin, and
 { a. taking heroin he might have been —! }
 { b. *been taking heroin he might have —! }
 { c. *have been taking heroin he might —! }

(7a) の前置された句が構成素を形成することは (3) に示される通りである。なお、VPP は、助動詞を除いた動詞とその右側にある要素の記号列が構成素を成すことができる理論を支持する規則と考えられるので、(I) の句構造規則を有する理論とも矛盾するものではない。ずれにせよ、VPP によって (3) の V^1 が正当化される。

VPD は動詞句の階層性を支持するけれども、各層が V^1, V^2, V^3 の如く異なる標示を持つかどうかについては何も言わない。さらに、VPP は本動詞とそれに続く要素が構成素を成すことを示す例であって、(3) で言えば、 V^2, V^3 とは何の関係もない。この二つの規則によって判明するのは、動詞句の諸階層のうち、最下層が他とは異なる独自の標示を持つということだけである。それを V^1 とすれば、 V^2 と V^3 を区別する証拠が更に必要となる。ASW は V^2 の証拠として、命令文、why (not) 構文、使役動詞の取る補文を挙げている。これらの構文に特徴的なことは、助動詞 have を取ることができないことである。

- (8) a. Drink your milk. (V^1)
 b. Be studying your Spanish when I get home! (V^2)
 c. *Have left the room by the time I get back! (V^3)
- (9) a. Why not bake a cake? (V^1)
 b. Why be slaving away in your office—why not be sailing on a yacht to Tahiti? (V^2)
 c. *Why have finished your work so soon? (V^3)
- (10) a. We made him leave the room. (V^1)
 b. We will let him be putting his clothes back on when Mary walks in the room. (V^2)
 c. *We made him have finished his work by the time we were back. (V^3)

以上の様な事実を最も簡単に記述する方法は、例えば使役動詞 make ならば、厳密下位範疇化素性 [$+V^2$] を持つように語目録に記載することであり、命令文であれば、 $S \rightarrow NP-V^2$ の句構造規則によって生成させることであろう。ここに V^2 の必要が生じる。ASW では明確にされていないが、動詞句の階層性のもう一つの条件は、上の階層は必ず下の階層を含むことである。つまり、 V^3 を取れば必ず V^2, V^1 をも取り、 V^2 を取れば必ず V^1 をも取るという条件である。このことは、(8)~(10) の文が示すように、十分に満足されている。order の補文は V^3 を取るから、当然 V^2, V^1 をも取る。

- (11) a. I order you to have finished the work by the time I get back. (V^3)
 b. I order you to be studying Spanish when I get home. (V^2)
 c. I order you to interview Bill. (V^1)

以上のように、ASW は句構造規則 (I) を正当化している。(I) すなわち (II) の分析案が (I) よりも経験的に優れた理論であることは上からも明らかであるし、その他幾つかの有利な点が指摘されている。たとえば、助動詞の関与する規則において、(I) は非構成素 Tense ($\{have/be/$

Modal}) に言及しなければならないが、(1) は Aux にだけ言及すれば良い。相助動詞 have, be の動詞的性格を説明できる等である。ただ、助動詞要素 Modal, have, be の順序関係を説明できないという難点がある。これは厳密下位範疇化素性によって解決されよう。have, be にそれぞれ $[+ _V^1]$, $[+ _V^2]$ という素性を加えれば、助動詞間の順序を固定することができる。

2. 修正案

この章では、ASW の提案した句構造規則 (1) に対する修正案を提示し、ASW が (1) の証拠として論じた事例を詳しく検討して、その問題点を指摘し、修正案に基づいてどのように説明されるかを考察する。

2.1 ASW の問題点

句構造規則 (1) は \bar{X} 理論の基本的な特徴を引き継いでいる。 \bar{X} 理論では、語い範疇が基盤にあり、そこから他の範疇が投射されて、派生され、基底部規則の骨格が決定される。そして、各範疇 X_i は独立した範疇として見做され、規則はそれに言及することができる。 \bar{X} 理論における句構造規則の一般的式型は次のようなものである。

$$(12) \quad X^n \longrightarrow \dots X^n \dots \quad (n \geq 1)$$

$n=3$, $X=V$ とすれば (1) の体系が出来上がる。そして、 V^1 , V^2 , V^3 は VPD, VPP の両規則によって、それぞれ独立した範疇として扱われている。(12) において、 X^{n-1} の左側の要素を Specifier, 右側の要素を Comp と呼ぶことにする。

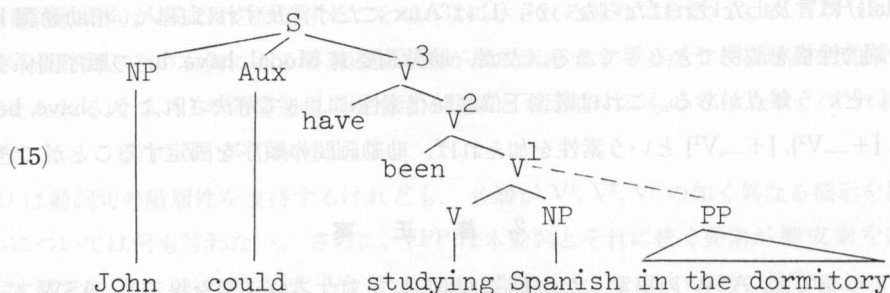
さて、句構造規則 (1) の一つの欠陥は、Comp を無視している点にある。Specifier については、各レベル共に考慮しているけれども、Comp について見ると、 V^1 の目的語しか考慮されていない。従って、目的語以外の Comp の要素をも含んでいる例文を、ASW がどのように説明するか問題となる。例えば、次の文を考えてみよう。

- (13) Fred could have been studying Spanish in the dormitory, and
John could have been studying Spanish in the dormitory, too.

- (14) Fred could have been studying Spanish in the dormitory, and
John $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. could have been } \phi \\ \text{b. could have } \phi \\ \text{c. could } \phi \end{array} \right\}$, too.

(14) の各文は、(13) から VPD によって派生される。問題は in the dormitory がどの節点に付加されているかである。特に (14 a) を説明するためには、in the dormitory は V^1 に付加されている必要がある。

次の樹形図において、V の Comp 中の NP と PP は、V との関係が異なる。前者が V によって厳密に下位範疇化される義務的要素であるのに対して、後者はその範囲外にある。このよ



うに性質の異なる二つの要素を一律に V^1 に付加することになると、 \bar{X} 理論の大きな利点の一つが失われることになるだろう。Jackendoff (1977) において指摘されているように、 \bar{X} 理論は厳密下位範疇化される要素とそうでない要素とを構造によって区別することができるという利点をもっている。彼の句構造規則のうち、特に V_n の補部に関する部分は次のようになっている。

- (16) a. $V^2 \rightarrow \dots V^1-(PP)^*(\bar{S})$
 b. $V^1 \rightarrow V-(NP) \dots (AP)-(PP)^*(\bar{S})^4$

Jackendoff は Comp を統語的並びに意味的な根拠に基づいて分類している。本稿では、彼の補部分類について論ずることを控えるが、彼の \bar{X} 理論は、細部に亘っては別としても、洞察に富む妥当な理論であると思われる。 \bar{X} 理論についての考え方は諸文法家によって非常に違っており、まだまだ研究の浅い分野である。このような状況の下で、他の文法家の考えを ASW の理論に適用することは必ずしも適当だとは、言えないかも知れない。しかし、構造的に Comp 中の要素を区別するということはどのような \bar{X} 理論も採用すべき提案の一つであると思われるので、ASW の体系にも取り入れて考察する価値はある。

さて、以上の議論を踏まえて、(14) をもう一度考えてみよう。仮りに、in the dormitory が (16) に従って V^2 に付加されるとすると、(14 a) が生成できない。なぜならば、studying in the dormitory が構成素を形成しなくなるからである。

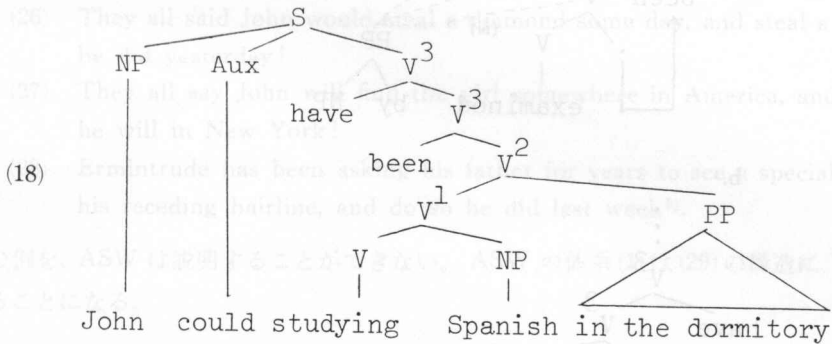
そこで本稿は句構造規則 (17) を提案する。(1) と異なる点は、 V^3 が繰り返し記号であること (これについては 2.4 を参照)、 V^1 と V^2 の Comp を明確に区別していることである。

- (17) $S \rightarrow NP-Aux-V^3$
 $Aux \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{Tense } do \\ \text{Modal} \end{array} \right\}$
 $V^3 \rightarrow \{ \text{have-en} \} -V^3$
 $V^3 \rightarrow \{ \text{be-ing} \} -V^2$
 $V^2 \rightarrow V^1-(PP)^*(\bar{S})$
 $V^1 \rightarrow V-(NP) \dots (AP)-(PP)^*(\bar{S})$

以下の各セクションで、(1) と (17) を比較検討し、(17) の優位性を説いていくことにする。

2.2 VPD

(17)の規則によると, (14)は VPD が適用される段階で(18)のような構造になる。ASW に従って, VPD を V^n -Deletion ($n \geq 1$) と規定すれば, (14 a)は V^2 , (14 b)は下の V^3 , (14 c)は上の V^3 が削除されて派生される。



2.1で, (1)の句構造規則を採用すると, (14 a)が生成できないことを述べた。しかし, VPD に先立って, 副詞句を削除する変形が in the dormitory を削除すると考えたらどうであろうか⁵⁾。そうすると, 副詞句がどの節点に支配されていようと問題ではなくなる。しかし, この種の副詞句削除変形は疑問の多い規則である。仮りに, 次の文が副詞句削除変形によって派生された文であるとしよう。

(19) John studied Spanish in the dormitory, and Bill studied French ϕ .

ところが, (19)の後半の部分は, Bill studied French in the dormitory というように意味が一つに決定できない。このように, 副詞句削除変形が疑わしい以上, この考え方は否定される。

さらに, 次の文を考察してみよう。

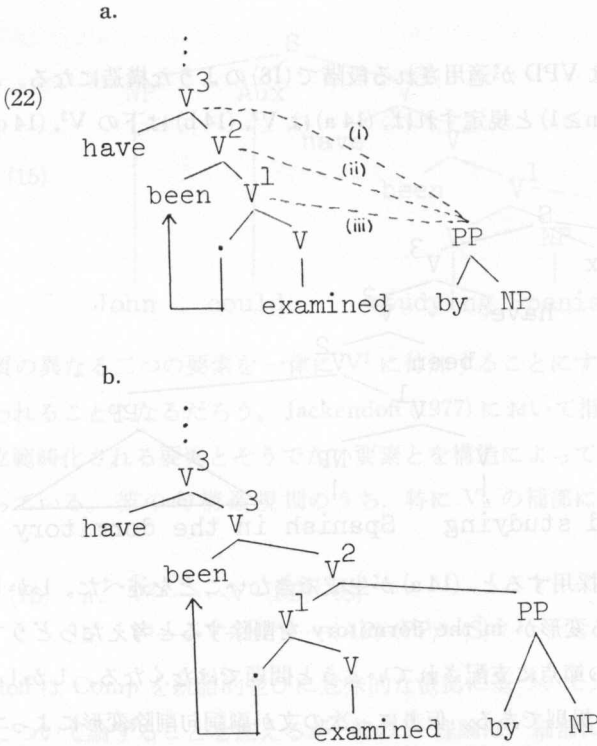
(20) Tohn could not have been examined by a physician, but

Mary $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. must have been } \phi \\ \text{b. must have } \phi \\ \text{c. must } \phi \end{array} \right\}.$

(21) John could not have been examined by a physician, but

he $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. must have been } \phi \\ \text{b. *must have } \phi \\ \text{c. *must } \phi \end{array} \right\} \text{ by a psychiatrist.}$

(22)は VPD が適用される直前の (20), (21)の構造を略記したもので, (22 a)は ASW の句構造規則 (1) による構造であり, (22 b)は本稿の規則 (17) による構造である。図の中の矢印は, Be-Shift により been が移動されたことを示している⁶⁾。さて, (20 a)を説明するためには, ASW は by NP を V^1 -(22 a)の (iii)の位置に付与しなければならない。しかし, こうすると examined by a psychiatrist が V^1 構成素となるため, (21 a)の文法性が説明できない。だからといって,



(21 a) を説明するために by NP を (ii) の位置に付与すると (20 a) が説明できない。(i) の位置にすると, (21 b) の非文法性が説明できない。なぜならば, been examined が V² 構成素を形成するため VPD が可能になるからである。いずれにせよ, ASW の規則 (1) では, (20), (21) を体系的に説明することは不可能である。今度は本稿の規則による (22 b) の構造をみてみよう。(20 a) は V², (20 b) は下の V³, (20 c) は上の V³ を削除して生成することができる。V¹ だけを削除すると (21 a) が生成される。(22 b) の構造では, been examined が構成素を形成していないので, 非文法的な文 (21 b) が生成されるということはない。また, (21 c) についても have been examined が構成素を成していないので生成されない。このように, 体系(17)は, (20), (21) を完全に説明することができる⁷⁾。

2.3 VPP

ASW は(7)の例をもとにして, VPP は V¹ 前置であると次のように記述している。

(23) V¹-Fronting

Move V¹ to the initial position in its clause.

しかし, VPP を更に調査していくと, (23) では不充分であることが判る。まず, 次の文を考えてみよう。

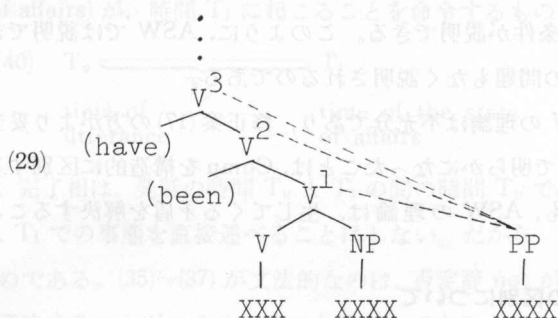
(24) Mary plans for John to marry her in Japan, and marry her in Japan he will!

- (25) We all said the Romans would destroy the Carthaginians in another Punic war, and destroy the Carthaginians in another war they did.

これらの文において、副詞句が動詞と共に前置されていることに注意する必要がある。次の例では副詞句を残した部分が移動されている。

- (26) They all said John would steal a diamond some day, and steal a diamond he did yesterday!
 (27) They all say John will find the girl somewhere in America, and find her he will in New York!
 (28) Ermintrude has been asking his father for years to see a specialist about his receding hairline, and do so he did last week⁹⁾.

これらの例を、ASW は説明することができない。ASW の体系(1)は(29)の構造に VPP を適用させることになる。



PP を V² または V³ に付加すれば、(24), (25) が説明できず、V¹ に付加すると、(26)~(28) が説明できない。VPD の場合と同様、ここでもまた、ASW は矛盾を引き起こすことになる。

(24)~(28) の文を一瞥して言えることは、VPP を V¹-Fronting として記述することはできないということである。VPP がどのような条件の下で適用されるかよく判っていないけれども、少なくともはっきりしている二つの点は、(i) 前置される動詞句が既出の文の動詞句と同一であること¹⁰⁾、(ii) 助動詞を前置してはならないことである¹¹⁾。V¹-Fronting は (i) の同一性の条件を狭く定義しすぎたと言える。むしろ、前置される句の幅は V¹ より広く拡大する必要がある。ただし、次の文は動詞の外の要素は前置できないことを示している。

- (30) *They all say John is probably stubborn, and probably stubborn he is!

さて、本稿の体系(17)では、(24)~(28) の様な例は非常に簡単に説明される。まず、VPP を上記 (i), (ii) の条件を考えあわせて、次のように記述する。

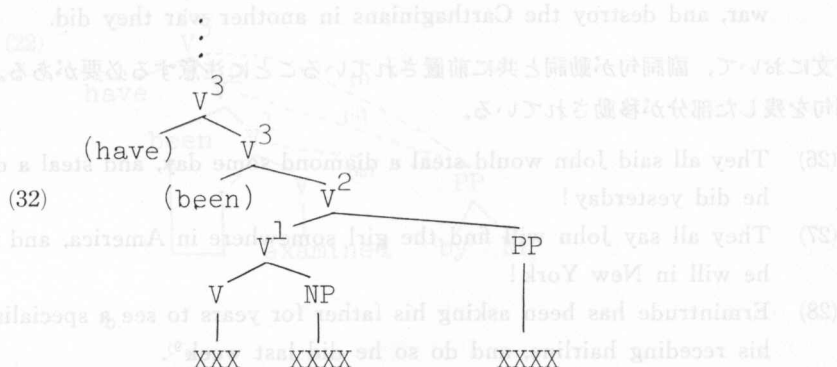
- (31) Vⁿ-Fronting; X Vⁿ

1 2 →

2# ϕ

where $1 \leq n \leq 2$

(31) が適用される直前の構造は, (17) では (32) のようになる。



同一性の条件の下で, V^1 または V^2 が前置される。例えば, V^1 を移動すれば (26)~(28) が生成され, V^2 を移動すれば (24), (25) が生成される。(31) には, $1 \leq n \leq 2$ の条件があるので, V^3 が前置されることはないから, (ii) の条件が説明できる。このように, ASW では説明できなかった上記各文が, 本稿の体系では何の問題もなく説明されるのである。

以上, VPP についても, ASW の理論は不充分であり, 修正案 (17) の方がより妥当であることが示された。なお, 2.2 と本節で明らかになったことは, Comp を構造的に区別するかどうかという理論的問題を抜きにしても, ASW の理論は, 生じてくる矛盾を解決することができないということである。

2.4 ASW における V^2 と V^3 の区別について

have-en を含む節点の標示と, be-ing を含む節点の標示が異なるという主張の証拠として, ASW が命令文, why (not) 構文, 使役動詞の補文を挙げたことは第 1 章でみた。本稿の提案する句構造規則 (17) は, それらどちらも V^3 として, 標示を区別していない。もし ASW の挙げた証拠例が不十分なものであることが判れば, have-en と be-ing を支配する節点の標示を区別する根拠はなくなる。この節では, Baltin (1978) を引用しながら, ASW への反論を試みていきたい。

ASW は, 命令文は Aux と have-en は取らないと主張しているが, 次のような文の場合,

(33) Do feel better.

(34) Don't drink that. (Baltin (1978), p. 178)

do が Aux の下に生成されている。さらに, 命令文はある特別な状況の下では have-en とも共起することができる。

(35) Don't have left the room when I get back. (ASW, p. 37)

(36) Please, Mr. Computer, don't have messed up like you did on my other dates. (Schmerling (1977))

(37) Don't have eaten all the bolonga by the time I get home. (Baltin (1978), p. 180)

これらの諸例については、もちろん ASW 自身気付いているが、特に (35)~(37) については、現在のところ説明できないと片づけているにすぎない¹²⁾。

命令文が have-en をとることができないのは、統語的な理由によるものか、意味的な理由によるものかが問題になる。ASW は、下記の文 (38) は非文であるが、同じ意味を持つ (39) は文法的であるので、それは統語的な条件によるものであると主張している。

(38) *Have finished your homework by the time I get home!

(39) Be finished with your homework by the time I get home!

しかし、Baltin によると、(38) と (39) は同じ意味を持つ (synonymous) のではなく、共通の随伴 (entailment) を有しているにすぎない。例えば、John 自身が宿題を行ったのであるならば、必ず、John は宿題を済ませた状態になっている。しかし、John が宿題を済ませた状態になっ
ていても、John 自身が宿題を行ったのかどうかは不明である。一般に、命令文は、ある事態 (a state of affairs) が、時間 T_i に起こることを命令するものと考えられる。

(40) $T_u \xrightarrow{T_p} T_i$
 time of time of the state
 utterance of affairs

ところが、完了相は、発話の時間 T_u と T_i の間の時間 T_p で起こる出来事について述べるものであって、 T_i での事態を直接述べることはしない。だから、命令文と完了相は意味的に矛盾するものなのである。(35)~(37) が文法的なのは、否定辞 not が付くことによって、動詞の完了相が事態を意味することができるようになるからであると考えられる。以上の説明並びに (35) のような文の存在から、命令文が have-en と共起できにくいのは、意味的な条件によるものであるとした方がよい。

why (not) 構文や使役動詞の補文についても、ほぼ命令文と同じような意味機能を持っていると思われるので、上と同じく意味的に説明することが可能である。

以上、 V^2 と V^3 を区別する根拠が薄弱であることが明らかにされた。次に問題になるのは、節点標示が V^2 か V^3 かということである。Baltin (1978) は V^2 を唱えているが、彼の仮説も Comp の特性を考慮していないものなので、前節で述べた ASW への批判がそのまま。当てはまる。従って、現段階では、(17) に示されるように、 V^3 が最も適切な標示であると仮定して差し支えないと思われる。

2.5 Pseudo-cleft と V^1

Culicover (1976) は、次の例を示して、動詞句の中でも V-NP は have-en, be-ing とは別に独立した構成素を形成しなければならないことを指摘している。

(41) a. *What John does is have left the area.

b. *What Mary will do will be have left the area.

c. *What Mary has done has been be leaving the area.

- d. *What Mary does is be leaving the area.

しかし、これらの例から、Pseudo-cleft 文の be の右側には V^1 だけが生起すると結論づけることはできない。

- (42) What Mary should have done was feed the pigeons at one o'clock.

- (43) What Mary used to do was feed the pigeons in the yard.

上記の文で、be の右に、feed によって厳密下位範疇化されない副詞句が現われていることは、とりまなおさず Pseudo-cleft 文の be の右側には V^1 構成素以外のものが生じうることを示すものである。要は、助動詞を除いた動詞句が構成素として生起していることである。ASW では次の文と (42), (43) を十分に説明し尽くすことはできない。

- (44) What Mary should have done at one o'clock was feed the pigeons.

- (45) What Mary used to do in the yard was feed the pigeons.

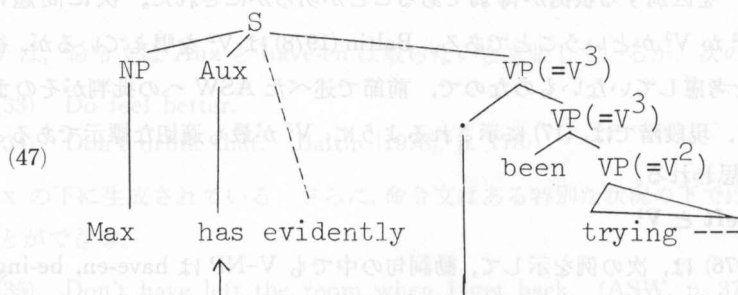
本稿の体系(17)によると、Pseudo-cleft 文の be の右側には V^1 または V^2 が生起すると簡潔に記述することができる。

3. 助動詞構造と関連した問題

伝統的な句構造規則 (I) を批判するに際して、Iwakura (1977) は文副詞の位置ということの問題にしている。例えば、文 (46) において、

- (46) Max has evidently been trying to please his boss.

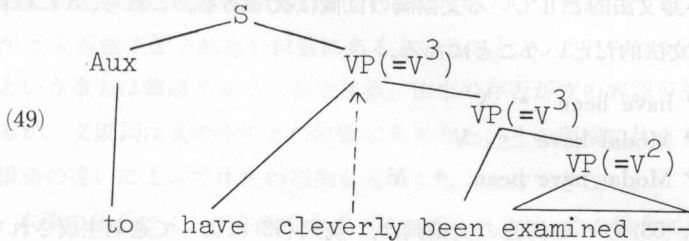
(I) の体系は、has evidently been が Aux であるという主張をすることになる。Iwakura によると、これは直感的に不自然な派生句構造である。Iwakura は何が自然な派生句構造であるかを明記していないが、彼の議論の根底には、「文副詞は S に直接支配される」という考えがある。Iwakura の理論では、(46) の evidently は、(47) の図に示される通り、S に直接支配させることが可能である。



have 繰り上げ規則によって、have が Aux の位置に上がるので (47) の矢印、点線に示される支配が可能になる。本稿の理論も、(47) の VP 標示を括弧のように変えれば良いので、全く同じ様に、文副詞の S 支配を説明できる。しかし、次の文を考えてみよう。

- (48) John is believed to have cleverly been examined by a doctor. (Jackendoff (1972))

これは(49)の構造をもつ。



have を Aux に繰り上げることはできないので、文副詞 cleverly を S に直接支配させることができない。この点において、伝統的分析 (I), Iwakura (1977) 及び本稿の分析はすべて不自然な派生句構造を生成してしまう。

さらに、Jackendoff (1972) で注摘されているが、文副詞を S に直接支配させなければならぬとすると、次の (b) を説明できない。

- (50) a. John will probably have been beaten by his wife.
 b. ?John will have probably been beaten by his wife.
 c. *John will have been probably beaten by his wife.

have 以下は VP (V³) に支配されているので、(b) において probably は S に直接支配されることができない。しかし、(b) は容認可能性の度合において (a) よりは低いけれども、(c) より高い文である。Jackendoff は (b) を説明するために、たとえ法助動詞が存在しても、have を Aux の位置へ繰り上げる随意変形があるのではないかと示唆しているが、これを認めると、彼が非文法的文と判断している次の文が生成されてしまうことになり、非常に都合が悪い。

- (51) *John will have probably read the book.

問題は、文副詞の S 支配の仮説が誤っているか、我々の助動詞分析が誤っているかのどちらかである。そもそも、文副詞の位置に関する問題を、文法の統語部門や意味部門で明確な形で定義し、それ以外の位置では文副詞が生起しない、と結論づけることに問題があると思われる。以下に見るように、文副詞が取りうる位置の多様性と各位置における容認可能性の度合いの違いは、文法以外の要因を考慮してはじめて説明されることであろう。この章では、文副詞の位置の問題は、助動詞の分析とは直接関係がないことを示したい。

まず初めに、文副詞は次の規則によって助動詞内部に配分されると仮定する。

- (52) 副詞移動規則; Adv [+Aux]

1	2	opt
2	1	

この種の規則は、どのような助動詞分析を採るにせよ、どのみち必要なものである。文副詞は文のどの位置にあらうと、文の意味に差異を生じさせない。従って、(52)の規則は、Chomsky (1976) で提案された理論的枠組みの Stylistic rule と考えて差し支えない。

さて、Jackendoff が非文法的としている文副詞の位置は次である。これら、S には直接支配されない位置だから非文法的だということになる。

- (53) a. NP have been * V
 b. NP Modal have * V
 c. NP Modal have been * V

この判断が正しければ、(53)の*の位置の文副詞は、規則(52)によって過剰生成されてしまうだろう。しかし、以下の諸例を観察していただきたい。

- (54) As I have been, *unluckily*, prevented by this accident I shall only give him the letters which relate to the two last hints. (Poutsma (1928))
 (55) If the hand represents the tongue, then the upper blade would be *roughly* represented by the finger-nails. (ibid)
 (56) She must have *certainly* perished, had not my companion, perceiving her danger, plunged in to her relief. (ibid)
 (57) He had been *apparently* occupied in a tactile examination of his woolen stockings. (ibid)
 (58) I should have *perhaps* said four ways, because that was for another system. (Hartvigson (1969))
 (59) All that, though ancient history, had been *regrettably* raked up by her appearance at the funeral. (ibid)
 (60) It is quite possible that he is wholly wrong; if indeed he is so, he will be *manifestly* the fool of all the world. (ibid)
 (61) In all the work I have seen, the linguistic analysis has been shallow, and the linguistic corpus to be handled has been, *understandably*, restricted. (J. Macnamara, "Language Learning and Thought")
 (62) And, most importantly, the process they describe can be *actually* carried out. (J. Weizenbaum, "Impact of the Computer Society")
 (63) Human societies (there are some brilliant exceptions) have been *generally* opposed to freedom of thought, or, in other words, to new ideas, and it is easy to see why. (J. Bury, "A History of the Freedom of Thought")

以上の文は、(53)からすれば非文法的と見做されるはずの文であるが、すべて資料に現われた文である。しかし、これらの文について注意しなければならない点が二つある。(i) 文副詞が S に支配される位置にある場合、すなわち次のような場合の文と比較すると、

- (64) the upper blade would *roughly* be represented by the finger-nails.

自然さの点で劣るというのが英語母国語話者の共通した意見である。しかし、文副詞の両端に

休止があれば、これらの文の容認可能性は極めて高くなる。その休止がなく、普通の音調パターンで発話された場合に、容認可能性の度合いが低いのである。(ii) 文副詞の右側にある要素のいずれかに対照強勢がある場合にも、これらの文は自然な文になる¹³⁾。このような複雑な条件が絡み合って上記の文の容認可能性は変化するのだが、いずれにしても、これらの文においては文副詞が S に直接支配されない位置にあるということと、これらの文が決して非文法的な文ではないという事実は確認することができる。休止の存否が文の容認可能性に大きな影響を及ぼしているが、文副詞は文の中のどの位置にあらうと、その両端に休止を伴うことができるので、統語構造の違いによって休止の有無を説明することはできない。

次に、本稿の体系によって生成された (54)~(63) の文が、他の場合に比べて、容認可能性が一貫しないのはなぜか、という問題に対する解決案を提示したい。carefully 等の副詞は、文修飾も動詞修飾もどちらも可能である。また、位置によって何を修飾するかがはっきりしている。例えば、(65 a) は文副詞の読みを持ち、(65 c) は様態の副詞の読みを持つ。

- (65) a. John will carefully have been beaten by his wife.
 b. John will have carefully been beaten by his wife.
 c. John will have been carefully beaten by his wife.

(65 b) は文副詞としても様態の副詞としても非常に不安定であり、容認可能性が他に比較して低い。ところで、本稿の体系では、(65 c) は文副詞としての解釈も受ける。なぜならば、副詞移動規則 (52) が適用される以前に、carefully は文副詞としての解釈を受けることができるからである。stylistic rule と意味解釈規則の関係については、Chomsky (1976) を参照。問題は、なぜ文副詞として認められないかである。

仮りに、次のような知覚上の方法 (perceptual strategy) が正しいと仮定してみる¹⁴⁾。

- (66) 動詞に隣接する要素は、動詞と密接な関係にあるものとして知覚される。

(65 c) において、carefully は動詞 beaten と隣接しているので、beaten と密接な関係にあると知覚される。そして、carefully は自然な形で beaten を修飾できるので、(65 c) は様態の副詞として理解されることになる。この段階で、(65 c) はたとえ文副詞としての潜在的解釈可能性を持っているとしても、その解釈は知覚上除外されてしまう。(65 b) の場合には、副詞と動詞が接している訳ではないので、方法 (66) が強力に作用しないと考えられる。従って、文副詞の解釈と様態の副詞の解釈が、どっちつかずの状態で共存することになり、余り自然な文とは言えなくなる。

Jackendoff では説明できなかった (50) の各文の容認可能性の度合いの違いは、次のように説明される。(c) の probably は方法 (66) により、beaten を修飾するものとして知覚される。しかし、普通の音調パターンでは、probably が動詞を自然な形で修飾することは意味的に奇妙である。このため (c) は容認可能性が極めて低くなる。(b) についても、上記 (65 b) の場合と同じように説明される。(50) にせよ (65) にせよ、(b) が (a) より不自然なのは、副詞が動詞に

近くなる程、両者の結びつきが密になり、それだけ方法 (66) が強く作用するからである。

(54)~(63) の文や (50) と (65) の (c) の文は、文副詞の両端に休止があると容認可能になることは既に述べた。これは、休止が副詞と動詞との結びつきを知覚的に弱める働きがあるからだと考えられる。そのため、副詞が動詞に隣接していても方法 (66) が作用することがない。

以上、文副詞は S に直接支配されなければならないという仮説は誤りであることが論じられた。文副詞の位置は多岐に渡っており、文法だけでは説明しきれない要因を含んでいる。このように不明確な現象を、ある説明の支持例として掲げることは非常に危険である。本章では、文副詞の位置の問題は、助動詞の分析とは全く無関係で、(66) のよう知覚の方法によって説明されるべきことを述べた。よって、文副詞が S に直接支配されないからといって、それが助動詞構造分析への直接の反証となる訳ではないことに注意しなければならない。

結 語

本稿では、動詞の補部を構造的に区別するという立場から、ASW の句構造規則を検討し直し、その修正案を提示した。動詞句を幾つかの層に分類し、それらの独自性、構成素構造性を示すために、VPD や VPP を証拠例として利用する訳であるが、動詞の補部を考慮しない限り、不十分な分析とならざるを得ない。本稿は動詞の補部として副詞句、前置詞句を扱っただけだが、補文や前置詞節などの補部は、動詞との構造関係に不明な点が多いことや、これらの節を含む文は長くなるため、削除・移動変形を加えた場合、その文法性の判断が非常に微妙になる等の理由のため考察の対象から外した。これらを十分に調査すれば、さらに深い助動詞と動詞句との構造関係の分析が押し進められていくにちがいない。

第 3 章で論じた問題は、これまで助動詞構造との関係の中で論じられてきたものであるが、助動詞構造とは切り離して、独立の問題として研究されていくべき性格のものである。

注

- 1) 本動詞分析案については、Ross (1969), Pullum and Wilson (1977) を参照。
- 2) しかし、Sag (1976) は、have-en を Modal と共に Aux の中に組み入れている。Jackendoff (1972) は、have-en と be-ing を一つの節点に並列させているという点で、(II) とは違っている。さらに、Emonds (1976), Culicover (1976), Iwakura (1977) 等を参照。
- 3) これらの文は、削除されている助動詞が多くなるに従って容認可能性が低くなっていく。Muro (1974) 参照。(d) に至っては非文法的であると判断する英語母国語話者もいる。Sag (1976) は非文法的と判断した (d) に基づいて、注 1) で述べたように、have-en を Aux の下に生成させている。しかし、より高い一般性を備えた助動詞構造の分析を得るためには、(d) は文法的ではあるけれども、他の理由により容認可能性が低くなっていると考えた方がよい。もし助動詞のすぐ次に何の要素もなければ、そこには動詞があっただろうと予測して、前の文脈から消えた要素を復元していくのが自然な文理解の過程であると考えられる。従って助動詞を含めた動詞句を復元するとなると、予測とは違っている分だけ復元に関わる文理解の負担が重くなる。(d) が (c) より容認し難いのは、復元すべき助動詞の数が多いこと、または法助動詞がその次に動詞を予測する度合いが相助動詞より強いこと等が理由として考えられるだろう。(a) の場合は、been がその次に動詞の

進行形か形容語が来ることを知らせるので、復元は予測通りで文理解の負担はかからない。

Sag (1976) が非文法的としている (ic) の場合も、

- (i) Peter seems to have been careful, and Bill seems $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. to have been } \phi \\ \text{b. to have } \phi \\ \text{c. to } \phi \end{array} \right\}$, too.

to は、文理解上、法助動詞と同じ様に処理されると仮定すれば、(i) の文の容認可能性の違いは、記上の場合と全く同じ様に説明される。

4) 特に必要のある節点だけを選んで部分的に引用した。* は繰り返し生起できることを示している。

5) この種の提案が Anderson (1976) においてなされている。

6) (II) の分析案にとって必要な規則である。詳細については ASW 参照。本稿の Be 移動が ASW と異なる点は、be を V³ に移動しているところである。しかし、これは ASW が提案している再構造化規則の諸条件を破るものではない。

7) Jackendoff (1977) の提案する受身文の分析によると、(20), (21) は次の構造を持つ。

- (i) ...and NP could have [been [A³ [A²·en [v² [v¹ examine] v¹ by NP] v²] A²] A³] v¹

V¹ を削除すると (21 a) が生成される。また、been examined が構成素を形成していないので、(21 b, c) が生成されることはない。もし受身文の分析を (i) のように修正するならば、本節で挙げた事実は、ASW の体系、本稿の体系のいずれとも矛盾しないので説明される。

8) Anderson (1976) からの引用。彼によると、この文は文法的であるが、前置されている動詞句が長すぎるため、容認可能性が低くなっている。前置された動詞句が短い (24) が完全に自然な文であることからみて、彼の主張は正しいと思われる。

9) Anderson (1976) からの引用。

10) 同一の動詞句ならば何でも前置できるとは限らない。

- (i) They all said John would kiss a snake *at midnight*, and kiss a snake *at midnight* he did!

- (ii) ??They all say John kissed a snake *last night*, and kiss a snake *last night* he did!

同じ時の副詞句を含んでも (ii) は極めて不自然である。これは、last night のような副詞句と Tense との関係に原因していると思われる。Pseudo-cleft 文においても、同様の現象がみられる。

- (iii) What Mary did *at midnight* was kiss a snake.

- (iv) What Mary did was kiss a snake *at midnight*.

- (v) What Mary did *last night* was kiss a snake.

- (vi) *What Mary did was kiss a snake *last night*.

なお、この種の時の副詞句に関しては、Kajita (1968, 1976) を参照。

11) ただし、次のような場合は可能である。

- (i) They all said John was being followed, and $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. *followed he was being} \\ \text{b. being followed he was} \end{array} \right\}$ (ASW より)

本稿の体系では次のように説明される。

- (ii) ...and he Aux [_{v³} [_{v³} be-ing [_{v²} [_{v¹} be-en [v follow]]]]]

V³ に be-ing があるため Be-Shift が適用できない。従って、Affix Hopping, do-Replacement のあとの構造は次になる。

- (iii) ...and he be [_{v³} [_{v³} [_{v²} [_{v¹} be+ing [v follow+en]]]]]

VPP は V¹ か V² を移動するので、(b) のみが生成される。do-Replacement については、Emonds (1976), Culicover (1976) を参照。

12) ASW 注 27

13) 文副詞と焦点の関係については、Asakawa (1976) に簡単に論じられている。

14) 次の文のように、助動詞がなかったり、または一つしかない場合には、(66) をそのまま適用すると、副詞が文修飾として知覚されなくなってしまう。

(i) John probably read the book.

(ii) John will probably read the book.

このように、(66)には助動詞の数という要因も絡んでくるので、更に精密化していく必要がある。

参 考 文 献

- Akmajian, A. and T. Wasow (1975): The constituent structure of VP and AUX and the position of the verb BE. *Linguistic Analysis* 1, 205-245.
- Akmajian, A. and S. Steele and T. Wasow (1979): Category AUX in universal grammar. *Linguistic Inquiry* 10, 1-64.
- Anderson, S. (1976): Pro-sentential forms and their implications for English sentence structure. *Syntax and Semantics* Vol. 7, edited by J. D. McCawley, 165-200, Academic Press.
- Asakawa, T. (1976): A note on sentence adverb and focus. *Studies in English Linguistics* Vol. 4, edited by A. Ota et al., 143-148. Asahi Press.
- Baltin, M. (1978): Toward a theory of movement rules. Unpublished MIT dissertation.
- Chomsky, N. (1957): Syntactic structures. Mouton.
- Chomsky, N. (1972): Remarks on nominalization. *Studies in Semantics in Generative Grammar*, by N. Chomsky, Mouton.
- Chomsky, N. (1976): Conditions on rules of grammar. *Linguistic Analysis* 2, 303-351.
- Culicover, P. (1976): *Syntax*. Academic Press.
- Emonds, J. (1976): A transformational approach to English syntax: root, structure-preserving, and local transformations. Academic Press.
- Halitsky, D. (1975): Left branch S's and NP's in English: a bar notation analysis. *Linguistic Analysis* 1, 279-296.
- Halliday, M. and R. Hasan (1976): *Cohesion in English*. Longman.
- Hartvigson, H. (1969): On the intonation and position of the so-called sentence modifiers in present-day English. Odense University Press.
- Hornstein, N. (1975): S and the \bar{X} convention. *Linguistic Analysis* 3, 137-176.
- Huddleston, R. (1978): On the constituent structure of VP and AUX. *Linguistic Analysis* 4, 31-59.
- Iwakura, K. (1977): The auxiliary system in English. *Linguistic Analysis* 3, 101-136.
- Jackendoff, R. (1972): *Semantic interpretation in generative grammar*. The MIT Press.
- Jackendoff, R. (1977): \bar{X} -syntax. *Linguistic Inquiry Monograph* No. 2, The MIT Press.
- Kajita, M. (1968): A generative-transformational study of semi-auxiliaries in present-day American English. Sanseido.
- Kajita, M. (1976): Henkei-bunpo no kiseki. Taishukan.
- Muro, S. (1974): Problems concerning verb phrase deletion. *Studies in English Literature* 50, 309-326.
- Oehrle, R. (1979): A theoretical consequence of constituent structure in Tough Movement. *Linguistic Inquiry* 10, 583-593.
- Poutsma, H. (1928): *A grammar of late modern English*. Noordhoff: Groningen.
- Pullum, G. and D. Wilson (1977): Autonomous syntax and the analysis of auxiliaries. *Language* 53, 741-788.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1972): *A grammar of contemporary English*. Longman.
- Reinhart, T. (1976): The syntactic domain of anaphora. Unpublished MIT dissertation.
- Ross, J. (1967): Auxiliaries as main verbs. *Studies in Philosophical Linguistics*, edited by W. Todd, Great Expectations Press.

Sag, I. (1976): Deletion and logical form. Unpublished MIT dissertation.

Schmerling, S. (1977): The syntax of English Imperatives. Unpublished paper.

Williams, E. (1975): Small clauses in English. Syntax and Semantix Vol. 4, edited by J. P. Kimball, 249-273, Academic Press.

On Results and Tasks concerning Studies of Peasantry Movement

by Kenzoku KANDA

農民運動史の研究試み	124
土佐道義の農民運動史研究の意義と位置	125
予言にみちみちた未来	130

Though the study of Peasantry Movement is a highly important one in the subject of history, this paper aims at examining present aspects of it and suggesting further discussion.

As regards Peasantry Movement in Hokkaido, there are, however, few case of study. The present writer will therefore point out the need for case of studies on the social functions of the indigenous capital and smaller landowners in a community.

一、はじめに

戦後後半より、戦前期農民運動・小作争議の歴史的意義づけをめぐって、さまざまな観点開示と個別実証研究が進められるようになった¹⁾。かつて、高橋清寿は「農民運動の意義と方法」のなかで、「農民運動史の本格的な科学的研究は、義理座敷ないし倉庫裏の奥の隅の隅のために決定的に重要である」(俣点筆名)と述べて、研究すべき対象を「歴史」に求めた。しかし、戦前期農民運動・小作争議に関する「科学的研究」の進展は、戦後半まで待たざるを得なかった。すなわち、1960年代後半より、70年代にかけて、歴史学・経済史の分野において、人民闘争史、日本ファシズムの特質、従軍親地主制に関する

1) 林 啓・「農民運動史研究の課題と方法—埼玉藩・大正デモクラシー・日本ファシズムとの関係」、『歴史評論』第300号、(1975)。

2) 農民運動史研究会『日本農民運動史』所載、1961。